

嵩山三闕銘

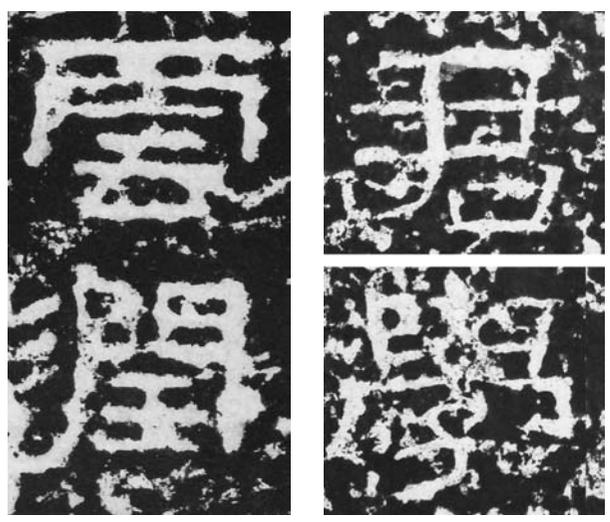
元初五年(118)  
延光四年(125)  
(後漢時代)

古い書法様式の刻石③

木雞

木雞室  
伊藤 滋

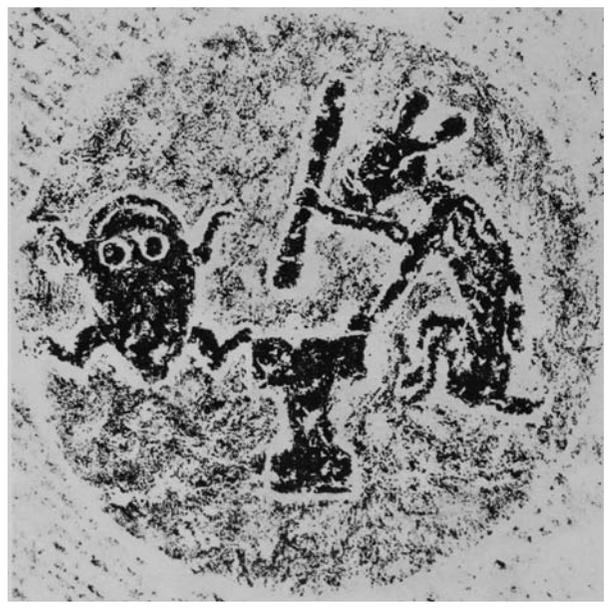
図版②



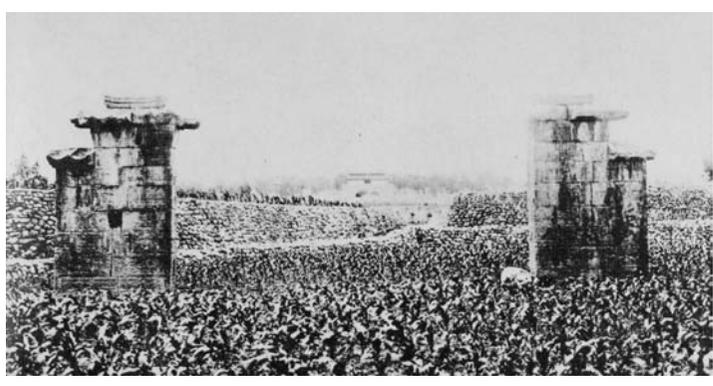
太室銘

請雨銘

図版③ 「兔 仙菜を搗く・蛙の図」



図版④ 太室闕



嵩山は、中国の五名山の一であり、国土の中央に位置していることから、「中岳」とも称されている。この嵩山の麓にあった中岳廟などへ至る参道に建てられていたのが、「闕」という装飾的な門柱の様な働きをしている石の建造物である(図版④ 参照)。現在この嵩山には、「太(泰)室石闕」「啓母廟(開母廟)石闕」「少室石闕」の三件の石闕が伝えられている。それぞ

れに文章や人物、動物などの画像が、刻されている。これら三件の石闕銘文を、「嵩山三闕銘」と称している。太室石闕は、隸書で(額のみ篆書)、啓母廟石闕、少室石闕は、篆書で文字が刻されている。図版に示したのは、啓母廟石闕の銘文の一部である。一字は、縦七センチ、横五・五センチのやや縦長の構成である。太い点画の重厚な筆勢を示している。前回に示した祀三公

山碑と同時代の書であるが、こちらの方が、篆書の伝統を強く意識した書風といえるであろう。また太室石闕銘や啓母廟石闕の一部である「請雨銘」に使用されている隸書も示した(図版②)。最後にこの銘文拓本に同時に拓されて知られている、「月で兔が仙菜を搗き、その横に蛙が描かれた有名な画像(図版③)」を示した。古代人の神話世界の表現である。

次号は、「天發神讖碑」です。この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りいただければ幸いです。

伊藤 滋 メールアドレス  
mokei@galaxy.ocn.ne.jp

図版① 啓母闕銘の部分 「やや縮小」



「木連理於・昨曰新而・咸來主而・」

# 書道芸術院 平成の群像 (2012)



2011年 現代女流書展「帰路花多」 (121×121)



## 最首翠風

### 「漢字」の 「新筆」とは？

身辺を整理していて古い雑誌「書品」の昭和二十六年九月号が目についた。当時の主幹は西川寧、松井如流である。その中のエッセイの頁の「あたりまへのこと」(篠田桃紅)に立ち留った。長いが引く。

——先頃私が春蘭さんと銀座で展覧会を致しました折、会場で春名好重氏(古筆の研究者)が「古筆といふものはあの時代の新筆でありました。今の書家は、今の時代の新筆を作らなければならぬ」といふ事をお話になりました。私は立派なお言葉だと思ひました。古筆があつた時代の新筆であつたといふことなど書をする程の人は、

どなたも恐らくよく御存知でせうが、知つてゐるといふことは別にこのことについて深く思ひを潜める必要があるやうに思はれます——

これが今から六十年前の言葉である。漢字部所属の私が思うのは、では漢字の新筆とはどういうものか、どうあるべきかという事である。

毎年、年初を飾つて人気の「朝日書道二十人展」のキャッチコピーは「本格の輝き」である。が、内容は伝統重視に傾き進歩的と言われる「朝日」の主張とどこか違う気がする。「本格」の言葉に偏重が感じられてならないのだ。かつて小林抱牛氏など毎日系の作家もちらほらと登場はしている。来春の出品作家には石飛博光氏の名も発表されていて楽しみではある。

千葉県展の審査に當つて思うのは人間が宇宙に行く時代に作品の殆どは相変らず王羲之や明清の時代を抜け出ないものだということだ。勿論それらの古典を学ぶことは必須条件であるが、「文字」を書く「書」といふもの。その中の「漢字」というジャンルで現代人の私はどんな作品を作ればよいのか。結果の出ない中を模索中である。

前述の「書品」の昭和二十六年。院史によれば、第四回書道芸術院展が開かれた。現毎日書道展の基礎を築いた先人達が轟いている。その中の一人師、種谷扇舟の理念を守るべく残年を歩んでいる。

# 書のひろば

理事長 辻元大雲

創立65周年記念役員作品巡回展  
北関東展(前橋市)・山陰展(倉吉市)

65周年記念役員作品巡回展も中盤にさしかかり、5会場目は北関東総局前橋市民文化会館にて7月6日～9日開催された。役員巡回作品と共に北関東総局審査会員候補以上の120点が展示され充実した展覧となった。

7日午後会場にて恩地春洋会長、理事長辻元大雲、担当の小竹石雲常務理事、小伏小扇理事による作品鑑賞会が多く参加者を前に開催され、夕刻会場を新前橋駅近くのアニバーサリーコートラシーネに移し祝賀会が開催され地元前橋市長様はじめ多くのご来賓を含め120名余の参加者で盛況であった。

西林乘宣総局長の元、役員の皆様のご努力ご協力に感謝申し上げます。

7月25日から28日まで山陰支局展が倉吉博物館にて開催。前日24日夕刻前夜祭として、倉吉シティホテルにて行われた。鳥取県中央書道連盟創立35周年記念会員作品展との合同祝賀会となり盛会。石田倉吉市長さんをはじめ多くのご来賓にお出でいただき、25日初日の開会式にもご挨拶と共にテープカットを恩地春洋会長など5名にて行った。その後会場にて作品解説を担当理事大

野祥雲、宮澤梅徑両理事にもお願いした。



開幕式の様子

第64回毎日書道展盛大に  
文部科学大臣賞は関口春芳氏  
会員賞に本院佐久間幸扇さん

64回毎日書道展東京展が国立新美術館と新装なった東京都美術館両館を全面使用して展開された。全作品を対象として選考される文部科学大臣賞には昨年に続き漢字部の関口春芳氏(創玄書道会)が受賞された。

注目の会員賞には本院より近代詩文書部の佐久間幸扇さん(白扇会・千葉)が受賞され何とか院の面目を保った。毎日賞以下の受賞者などは別掲報告を参照いただきたい。

7月22日には表彰式がザ・プリンスパークタワー東京にて200名を超す参列者を得て盛大に開催され、院主催の出品者懇親会も同日芝パークホテルにて200名余の参加者で盛況であった。



喜びの佐久間幸扇さん

2012夏 春洋会書展・水野春翠展

夏の銀座で恒例となった文春画廊での春洋会書展が「龍」の造形をテーマに一階で展開。恩地春洋会長はじめ会員33名による多彩な「龍」の跳躍はなかなか見応えある充実した内容であった。更に二階では大字書大作による水野春翠個展が開かれており、観る者を圧倒する気迫、気力の作品群で充実。失礼ながら傘寿を超えられた方の作品とはとまたまた感服、大いに元気づけられる思いであった。



個展を開催した水野春翠さん(右)と  
昨年個展を開催した石田春窓さん(左)

毎日研修旅行団「楽竹の会」書展

昨年第63回毎日書道展会員賞・毎日賞受賞者選抜の研修旅行団「楽竹の会」の凱旋報告展がアートサロン毎日にて7月17～21日まで開催。大楽華雪団長、小竹石雲副団長、佐藤菜扇・木佐貫鮮水・川嶋里美さんなど本院代表団員を含む20数点を展示。盛会であった。

毎日研修旅行団員決定

第64回毎日書道展会員賞・毎日賞受賞者より選抜して研修旅行団が派遣される。今回は薄田東仙団長、室井玄簪副団長、中野薫秘書長で、10月に北京をはじめ各地域をめぐる予定である。本院より近代詩文書部会員賞受賞の佐久間幸扇さんが選抜され訪中することとなった。

# 前衛書 (五)

津田海仙

# 現代詩文書 (五)

斉藤理舟



第64回 書道芸術院展「いのち」

津田海仙書

## 書は線の芸術

師（浜谷芳仙先生）に指導を受け、当然の様に前衛書に取り組んできました。書径舎に入会し、故深松海月先生の指導の基、師をはじめ書径舎の先輩や仲間の支えをいただき、たがむしやらにやってきました。師の教えは、「線は落筆深く押し切る」である。前衛書は何でもありの自由の世界だと教えてくれたのは仲間である。勉強会で、墨をなげつけ、筆でなぞったり、布切れで擦りつけたりと楽しく書いてきた。また、墨についても墨液だけではなく、ボンド・膠・粉絵具などを混ぜたものや塗料を使用したりして思い思いの作品を書いた。こんなことをして書いていると偶然と面白い作品ができることがある。自分があたかも意思を持って書いているかのような錯覚に落ちる。だが線を見るとなんとなく頼りない。故中島邑水先生から厳しくお叱りを受けた。前衛書は「線が命、古典の勉強が一番」だと教えて下さった。静かに揮毫される中島邑水先生の姿が懐かしくてたまらない。リズムミカルな線、奥深い書に線に何とも表現し難い印象が心に残っている。

## 21世紀の書

### —私の主張—

楽しく作品を作るには、リズムは大切な要素です。リズムは一字の中にも、作品全体としても生きていなければなりません。リズム表現がスムーズであれば、全体が生々となります。リズムとは、筆の運びの遅速であり、筆に加える力の軽重から成るものです。渴筆もリズムによって生ずる現象の一つでありましょう。勿論、墨量や筆の毛質に大きく左右されるものもありますが、リズムは、題材の内容によって波長を変える事が大切です。雄大・豪華な

リズム、明るいリズム、穏やかなリズム等々。線質を一体化されて生れてくるものですので、どの様な作風にしたいのか、どの様な気持を表現したいのかを充分心に留め置いて、書き始めるべきでありましょう。題材が自作の言葉であれば、更に適確な表現も可能になります。

写真は、昨年の千葉県展に出品した作品です。三木屋童氏の俳句の添え書きの部分を書かせていただきました。どんよりとした冬の日本海、冷たい風が波だけを運んでくる——荒々しくももの寂しい風景の記述であります。書作は……？



2011 千葉県展

斉藤理舟書

# 「子供と共に成長したい」

大原 律子

(漢字部・審査会員)

書との出会いは、私の人生をより豊かなものとしてくれました。

長女が保育園の年長組になった頃、書道誌(筆の友)の事を知り、字の下手な私も勉強してみよう。子供と一緒に上手になりたい。美しい字が書けたらどんなにいいだろうか。と思い、早速近所の子供たち何人かと一緒に競書に出品するにしました。

長男が年長組の時、「保育園で硬筆を教えて欲しい」と頼まれ、自信もなく、不安ではあったけれど、教える事

になりました。保育園で「文字を正しく、整えて書きましょう」等と教えていくうちに、自分の未熟さに恥ずかしくなり、もっとも勉強しなければと強く思うようになりました。

そんな時、高知市公民館活動の中で、書道を大野先生が教えられている事を知り、すぐに入会する事になりました。

月例競書に出品し、級が上がる事だけで喜び、古典をじっくりと臨書し学ぶ事がなかったのですが、先生にお会いしてはじめて臨書を教えていただくようになり、授業内容などの豊富さや新鮮さに驚くばかりでした。

基本的な事から次々と多くの事を学び、毎日必死で練習したことでした。

大字書との出会いも驚きでした。教室の仲間の作品を鑑賞しながら、いつか自分も挑戦したいと、長い間眺め

ていたように思います。

大きな筆で書き、初めて見て頂き、批評を受けた時は、恥ずかしさのあまり額から汗が「ドット」流れ落ちたことは今も忘れる事が出来ません。

山登りを趣味としている私は、山々の様子や季節の移り、日常の出来事などを考えながら、古典の中から書きたい文字を選ぶ事になっているのですが、昨年の7月、石川県と岐阜県にまたがる白山(標高202m)に登り、翌朝下山中に石車(小石に乗って滑り転ぶ事)に乗ってしまい左手首を骨折し、下山できなくなりました。

登山仲間の適切で素早い行動によって幸いにもヘリコプターで石川県の病院に搬送され、命拾いをしました。この時ほど、山仲間の親切が身に染み込んだ事はなく、また同時に「絆」「命」の大切さをもしみじみ思いました。

そして、今年3月11日「東北大地震」が起き、古今未曾有の犠牲者が出て、益々「命」「絆」の二字が頭から離れなくなり、この二字に挑戦しているのですが、現実とは思えない現実を見てその意味の深さに心打たれて、簡単に表現出来そうにはありません。

書が上達するためにはどうしたら良いだろうかと、仲間は勿論、他の人たちの書展も多く鑑賞するようにしていますが、却ってあせる気持ちが強くなります。そんな時、大野先生の「古典に親しむ」の本を読ませて頂きました。その中の「書道は甘くない。せめて一週間に2〜3回は筆を持ちたいもの。」



H19年秋季展 菊花賞「灼」

また、古典を臨書している所は覚えて、手本を見なくても書けるように、繰り返し練習をし、前と今の作品を比べ、作品の良し悪しを見分ける力があって良い作品が書けるのです」の言葉が心に強く残っています。この度、審査会員に推挙頂き、身に余る光栄と感謝しています。秋季展(H19年10月)で菊花賞(灼)、第60回展で準大賞(影)を頂きました。全く思いがけない事で先生より電話を頂いた時は、二度とも信じられませんでした。先生のお陰と感謝しています。

「子供と共に成長できたら」と思っ



第61回書道芸術院展 準大賞「影」 大原律子書

# 役員作品巡回展

併催 北関東総局展

会期 平成24年7月6日(金)～9日(月)  
会場 前橋市民文化会館

実行委員長(北関東総局長)

西林 乗宣

北関東総局は群馬・埼玉・栃木の3県をエリアとする。

5日(木)

午前9時から作品搬入、後陳列。巡回作品の47点は、周りの者が手を出し、落としてシワを作ったりしては申し訳ないので東洋額装さんに一任。地元の作品は審査会員候補以上の120点を展示。

6日(金)

開幕。会場は県庁所在地前橋の中心部に位置し、交通の便よし。書道関係者が次々と訪れる。

7日(土)

午後1時から2時半までの間、恩地春洋、辻元大雲、小竹石雲、小伏小扇4講師による作品鑑賞会を開催。

出席者はおよそ150名。岡山、大阪そして千葉からご足労くださった4先生方にあらためて感謝。(以下概要)

(恩地会長)

今日の院の発展を語る時、会場入口に陳列された5人の歴代会長そして地元群馬の山本幸水、大澤雅休、竹胎といった先達を忘れてはならない。許されるものならこれら先輩の作品も欲しかった。書道芸術院は常に前衛的で革新的な作品を追及、皆さんもそれに続く作家集団であってほしい。

(辻元理事長)

漢字は関西、高知を中心とする新しい感覚の書から、鳥取、千葉、群馬の伝統派まで幅が広い。かなは下谷洋子、石井明子氏の二つの大きなまとまりがある。書泉会は関西の榎倉香邨氏の影響をうけ、玉松会は永井幸子氏のを襲いでそれぞれ個性を發揮している。現代詩文書は白

となっている。

(小竹常務理事)

現代詩文書は言葉を選ぶことが大きな比重を占める。私の師は「白がきれいでなくてはいけない」とよく言われた。同時に動きリズムが大事。文字のデフォルメもやり過ぎると品が下がる。また書き過ぎてもいけない(持参された作品を数点紹介)。

(小伏小扇担当理事)

芸術院では漢字部、毎日展では大字書部に所属。1字か2字の表現なので感動を大事にし、心の熱い思いを筆にのせている。このごろは甲骨に挑戦している。占卜は単純で新鮮。甲骨には筆順なく用筆は臧鋒でやっている(持参された作品を数点紹介)。

祝賀会

主催者並びに主管の挨拶にはじまって地元前橋市長ほかの祝辞で盛大に進行。出席者115名。

8日(日)

7日にはほとんどの観覧者が来られたためか、出足はもうひとつ。

9日(月)

前日に続いて出足は同じ。午後3時に閉館し、作品の撤去搬出作業を行う。全てが終了したところで主管が

挨拶。

「お陰様で大事業が無事終了しました。各部署で仕事をしておりました皆さんに改めて感謝申し上げます。辻元理事長からは立派な展覧会、盛大な祝賀会だったと言って頂き、栃木から参加された方からは、皆さんに親切にして頂きとても嬉しかったです。入場者数はおよそ1200名。県内の一部の会派の方々の見えなかったのが残念。反省点としては、案内ハガキだけでは中央の大手の書道団体の役員作品が巡ってくると錯覚されたふしあり。やはり地元出品者名も全員別紙にプリントして同封すべきだった。」

(金井如水監事には企画、立案、運営の全てにわたって大変お世話になりました。誌上を借りて深謝。)

取材―毎日新聞前橋支局、上毛新聞社。

以上



会場入口（歴代会長作品）

## 《 総局展風景 》



恩地会長説明、鑑賞



会場一望



小竹常務理事説明、鑑賞



辻元理事長説明、鑑賞



祝賀会（西林主管あいさつ）



小伏（小）担当理事説明、鑑賞

特別研究部臨書課題

Ⅱ(毎日展公募サイズ以内・縦横自由)左記の掲載以外も可

〈解説〉 この碑には、建碑の年月がなく、武徳九年(六二六)から、貞觀七年(六三三)に至る間、(69歳〜76歳)、いづれかとしか推定しようがない。

早くも、貞觀中に火災にあって、よい拓本を

求めることは、難しくなっていました。筆の遣いは、鋒を包んだ筆勢で書く円筆である。穏やかな風趣を有している。また、気品が高く高貴を感じ呼吸のつながりが大切である。全文二〇二七文字。(編集部)

顯<sub>二</sub>至<sub>一</sub>仁於藏用祖述  
先聖憲章往哲夫其  
道也固以孕育陶均  
苞含造化豈直席卷

用紙 半紙普通判  
左の法帖の中から  
何文字臨書してもよい。  
(掲載部分以外は不可)

※落款を必ず入れる  
署名、もしくは  
〇〇臨  
(押印のみ可)



毎日展公募サイズ以内・縦横自由  
左記の掲載以外も可

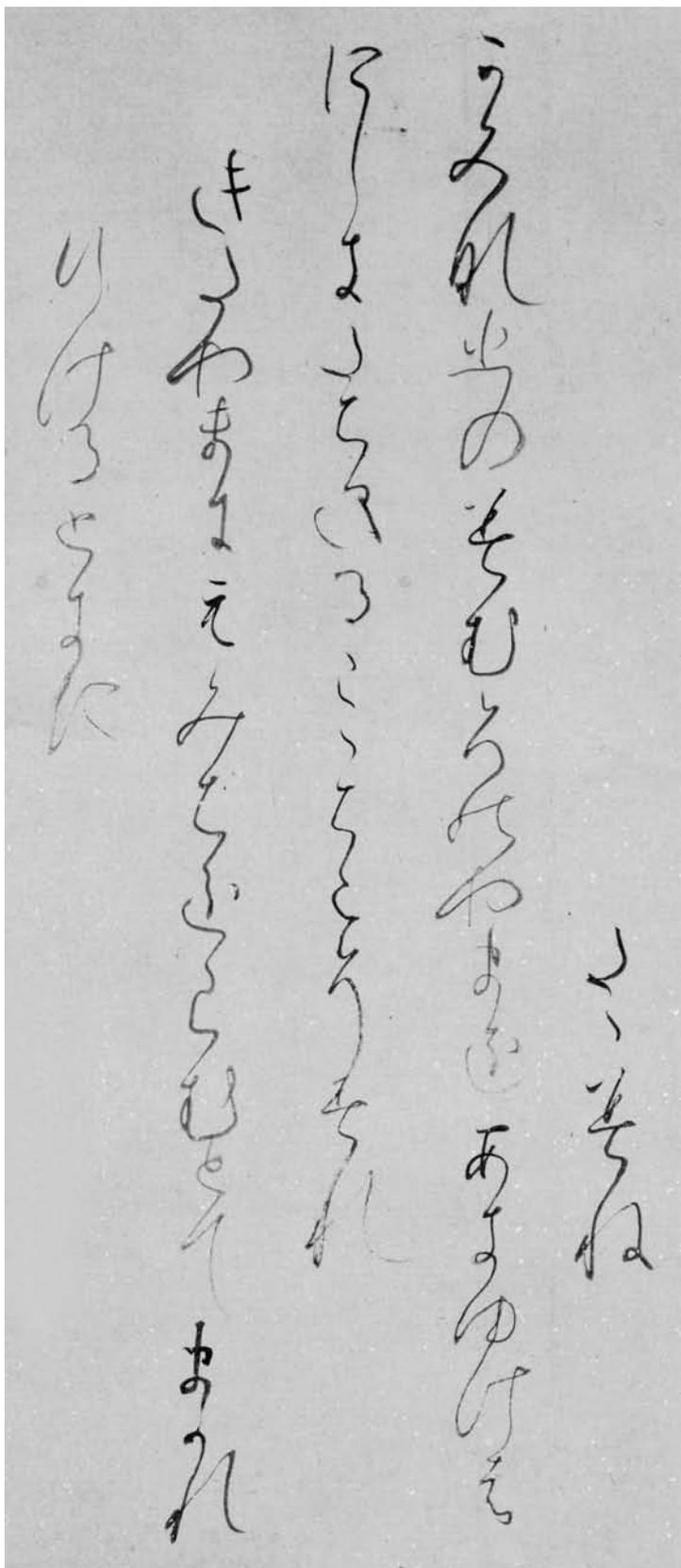
注 かな研究部競書作品は、左の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

- ・落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)
- ・用紙は半紙普通判(料紙可)へたて長に使用
- 別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は、半紙サイズに切って使用のこと。

〈よみ〉

かみな<sup>可</sup>那<sup>部</sup>比<sup>部</sup>の<sup>能</sup>みむ<sup>美</sup>ろの<sup>能</sup>やま<sup>多</sup>を<sup>多</sup>あ<sup>美</sup>き<sup>支</sup>ゆ<sup>支</sup>け<sup>者</sup>ば

にし<sup>文</sup>きた<sup>多</sup>ち<sup>多</sup>さ<sup>多</sup>る<sup>多</sup>こ<sup>多</sup>ち<sup>多</sup>こ<sup>多</sup>そ<sup>多</sup>す<sup>多</sup>れ  
きた<sup>多</sup>や<sup>多</sup>ま<sup>多</sup>に<sup>多</sup>も<sup>多</sup>み<sup>多</sup>ぢ<sup>多</sup>を<sup>多</sup>ら<sup>多</sup>む<sup>多</sup>と<sup>多</sup>て<sup>多</sup>ま<sup>多</sup>か<sup>多</sup>れ  
り<sup>文</sup>け<sup>文</sup>る<sup>文</sup>と<sup>文</sup>き<sup>文</sup>に



解説 この第二種は、現存する九巻の内、巻一・三・五・八から成り、また、高野切の三種類のうちで最も多くの同筆、または同系統とされる古筆を有している。そのおもなものに、「桂本万葉集」「関戸本和漢朗詠集切」「御物雲紙本和漢朗詠集」などがある。この二種の字形にはやや扁平でスマートさに欠けるものがあり、周囲の空間を押し広げ、それによって一段と包容力をもった文字の造形性が顕著に示されている。料紙は、他の高野切と同様厚手の麻紙風のもので、全体に雲母砂子が散りばめられ荘厳な趣を醸しだしている。

(編集部)

漢字規定 初段以上 【九月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

半田藤扇選書



芭蕉先有聲

よみ (芭蕉先<sup>ばしゅうま</sup>ず聲<sup>こえ</sup>あり)

書体 自由

### 習い方解説 (五)

半田藤扇

芭蕉先有聲  
(芭蕉先<sup>ばしゅうま</sup>ず聲<sup>こえ</sup>あり)

白居易「夜雨」結句

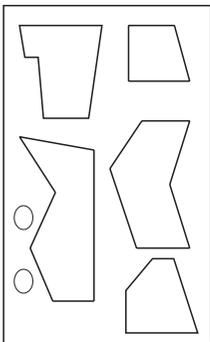
芭蕉の葉に落ちる雨音に夜雨を  
気づく。

白居易は詩人で日本への「平安  
文学」に大きな影響を与えた人  
である。

「源氏物語」も長恨歌が影響を及  
ぼしていて、自作の評判を生前に  
知っていた。

今回は、古くから愛用している  
羊毛筆で書いてみました。

左記に文字の造形を図解して  
みました。文字の大きさを各々工  
夫するのもよいと思います。また、  
紙・筆などの用具にもいろいろ挑  
戦してみてください。



漢字規定 秀級以下 【九月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

小林琴水選書



霜林雪岫

よみ (霜林雪岫)

書体 楷書

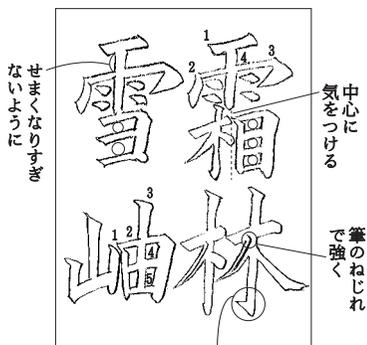
### 習い方解説 (五)

小林 琴水

#### 霜林雪岫

霜におおわれた林や、雪のつもっている山々。いずれも寒々とした冬の情景。

楷書も流れが必要です。一画一画ブツブツと切れないで、草書を書く様な気持で、気分をつながなければいけません。一画一画墨をつけたりしないように、心がけて、美しい流れにのせて下さい。



次の画へ続くようにはねる

習い方解説 (五)

下谷洋子

夏の野の茂みに咲ける姫百合の  
知らぬ恋は苦しきものぞ

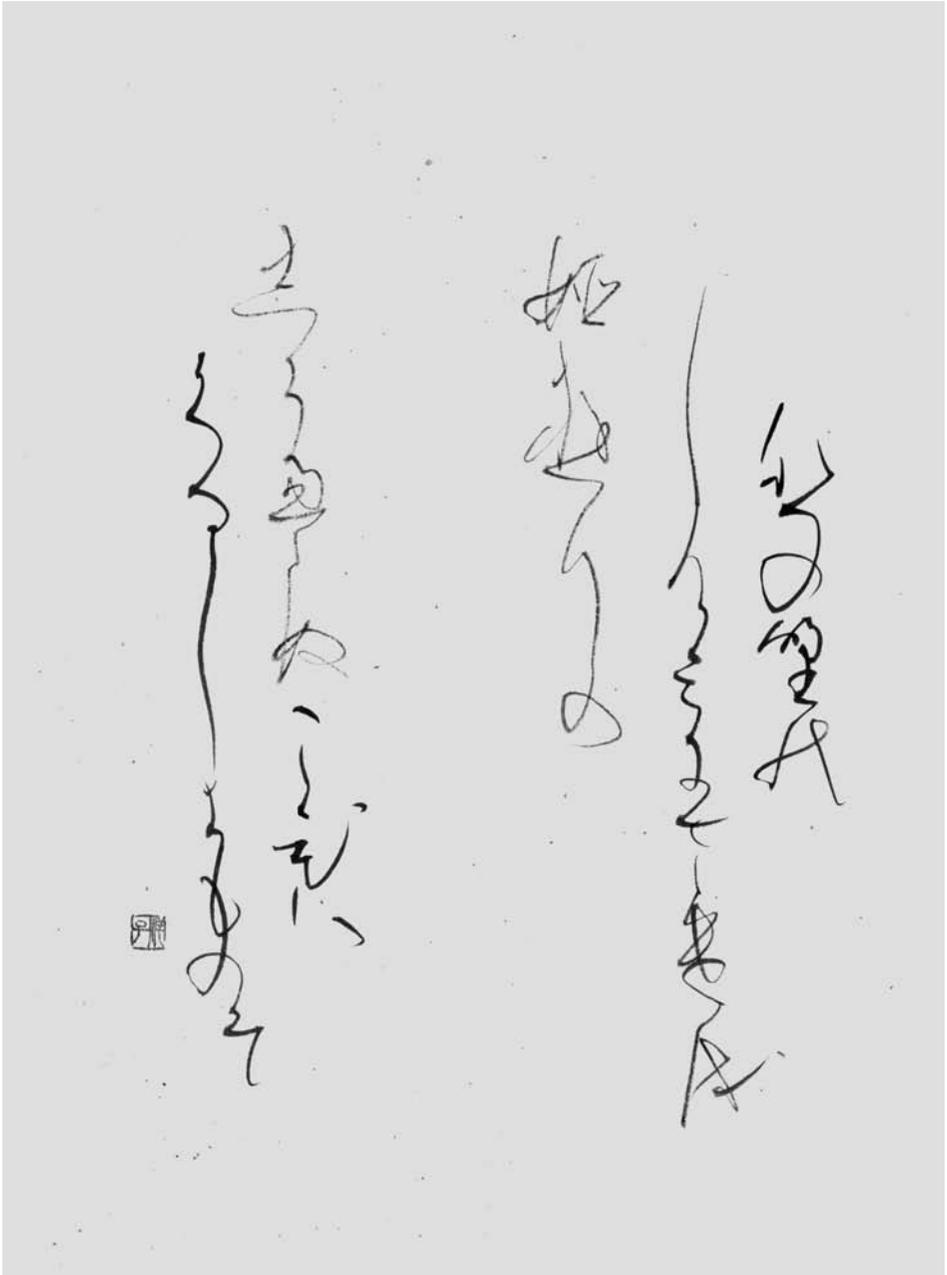
(万葉集)

かなは左右に揺れながら流れま  
す。高野切の時代はその揺れも控  
えめ(静的)でしたが、針切や香  
紙切などの時代になるとかなり動  
的な激しさも出てきます。

創作にあたっては、この静だけ  
では物足りなさも出てくるので静  
の中に動、動の中にも静と静と動  
を巧く取り入れたいと思います。

動というのは、文字の変形や揺れ  
幅の大きさなどを指します。そこ  
で問題になるのが文字のデフォル  
メです。かなは連綿することによっ  
て、同じ変体があっても姿が変わり  
ます。例えば能一字でも何通りも  
あります。作品を華やかにしよう  
とするあまりに字形が歪み誤字に  
なることも多々あります。思い込  
みをせず必ず字母(原字)を確認  
し、極端なデフォルメや突飛な動  
きは避けましょう。

注 『野の』は『野々』とは書  
きません。



よみ方 な(那)つの野の(能)しげ(介)み(三)に(介)さけ(遣)る(流)姫ゆ(遊)りの

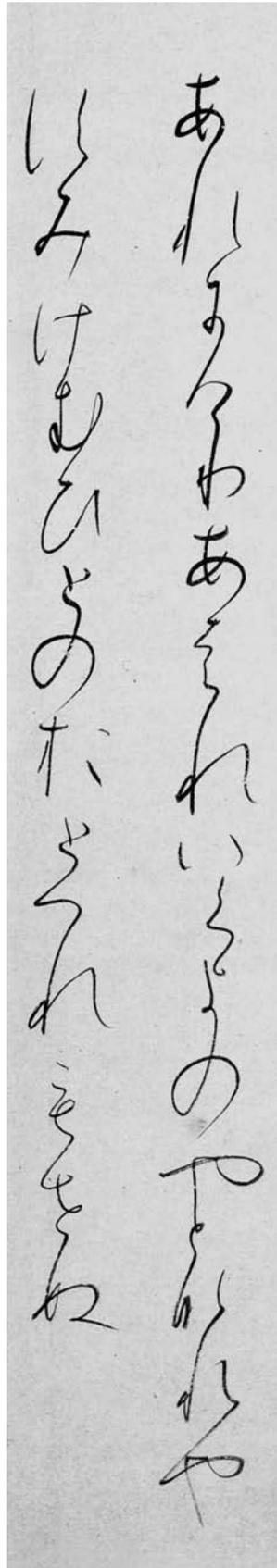
し(志)らえ(盈)ぬこひ(飛)は(八)く(久)るしき(支)ものぞ

創作

かな規定 秀級以下 【九月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1/2 (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全臨、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種  
(掲載写真縮小93%)



よみ方 あれに(尔)け(介)り(利)あは(者)れいく(久)よのやどな(那)れや

す(須)みけむひとのお(於)とづれも(毛)せ(世)ぬ

### 習い方解説 (二)

木村東舟

かな条幅規定 【九月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切(料紙可)



木村東舟選書

しつかなる秋日となりて百日紅  
いまだも庭に散りしきにけり  
(齋藤茂吉)

半切横書きは、行の長さが短い  
ため文字選びに苦心します。構成  
上、字間・行間の取り方も大切で  
す。時には、行に短い行を添える  
などして、立体感を出します。中  
央部の百日紅の左右の行間は、見  
苦しくならぬよう広めに空けると  
よいでしょう。行が立ち過ぎぬよ  
う右に傾斜させて、リズム感のあ  
る作品に仕上げたいものです。

※よこ形式に限る

よみ方 しつ(徒)か(可)な(那)る秋日とな(奈)りて百日紅

い(以)ま(万)だ(堂)も(毛)庭に(尔)ち(連)り(利)し来に(二)け(遣)り(里)

創作

出品券

貼付位置

漢字条幅規定 初段以上 【九月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

西林乘宣選書

春寒賜浴華清池  
温泉水滑洗凝脂  
春寒うして浴を賜う華清の池、温泉水滑らかにして凝脂を洗う。

春寒賜浴華清池 温泉水滑洗凝脂

(春寒うして浴を賜う華清の池、温泉水滑らかにして凝脂を洗う。)

(長恨歌・白居易)

書体||自由

漢字条幅規定 秀級以下 【九月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

大野祥雲選書

大雅久不作

祥雲

大雅久不作

(大雅久しく作らず)

(李白)

書体||自由

習い方解説 (五)

西林乘宣

草書です。初め字典にあるような調子で書いてみましたが、どうしても弱々しくなってしまうので、肉太にして単体でやってみました。他に連綿調でいくもあります。『書譜』や『十七帖』を平行して勉強されることをお奨めします。(大意)春浅く寒さのまだ残るころ、彼女は華清池での沐浴を許された。滑らかな温泉の湯は艶やかな肌を洗い)

習い方解説 (五)

大野祥雲

「詩経」の大雅のような格調の高い詩風が久しく磨れてしまっている。下の句は「私が、今、年老いて衰えてしまったなら、誰がそれを復興していくだろうか」とある。李白の復古への声です。厚味のある線で大胆に運筆。雅久を視覚的に大きくし、大、不は小さめに書きました。気脈の貫通が大切かと思えます。

名もしらぬ遠き島より

流れ寄る椰子の実ひとつ

故郷の岸をはなれて

汝はそも波に幾月

島崎藤村作詞・大中寅二作曲

小燕書

用紙はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体は自由

## 習い方解説 (五)

稲垣小燕

今回は、かなの部分の連綿を多くしてみました。

かな書きの勉強をしている人は、その連綿の学習を大いに反映させ役立たせてください。

漢字、かな交り文は「漢字」だけ「かな」だけの学習よりは複雑でむずかしい要素が含まれています。

前回にも述べましたが、作品として仕上げていくには、一字一字を正確に丁寧に書くこと、字間・行間のとり方を考えてバランスよくまとめる工夫をすることが大切です。

手馴れている人は、歌の内容の抒情表現に挑戦されては如何でしょう。

※落款を必ず入れる。

(自分の名前を入れること)

# 木一作品 各部総評

NO. 614

ペン字部 師範 小林 白扇

一点一画ゆるぎない書き方で最後までリズムが一貫している。題もしっかりとした優作である。

◎ペン字部総評 楷書は点画のしっかりとした作品が多かった。草書を使った作も見うけられたが、字典で調べることも大切。(蒼玄評)

てるてる坊主 てる坊主  
あーに 天気にしておくれ  
いつかの夢の空のように  
晴れたら 金の鈴あげよ

朝原鏡村作詞・中山晋平作曲  
白扇書

漢字条幅部 師範 種谷 満枝

切れ味爽やかな木簡隸スタイルで安定感よくまとまりあり。落款のバランスも見事。印影やや薄い。

◎漢字条幅部総評 上級者参考例による楷書表現平凡作多し。創意工夫の鍛錬を望む。下級同一字体の難しさを痛感。(大雲評)

天生麗質難自棄  
朝選在君王側  
満枝書

現代詩文書部 特選 佐々木一峰

堂々とした大字と、添えられた、細字が見事に調和し余白が輝いている。大字に懐の開閉があれば尚良い。

◎現代詩文書部総評 正確な文字の形で斬新な構成をするのは難しい。お互いに努力しよう。(鄭雲評)

夏は薄く涼しい、その  
花の影は、  
空の  
深淵に  
響き渡る

かな条幅部 師範 末棟 直子

美しい料紙にマッチした無理のない運筆が静かな世界を創り、墨色の良さと相まって香り立ちます。

前衛書部 特選 山崎 恵

ロマンが凝縮された作品。これを支えるのは適量の濁筆と細線、十分な余白も加わる。

◎前衛書部総評 前回の期待に沿う作品多し。これに冒險を加え持ち味の拡大を願う。(慧香評)

鳥の羽が風に揺れる様子、  
墨の濃淡で表現された

◎かな条幅部総評 字数の少なさを意識するあまり余白に悩んだ跡が多く目立った。書いた部分の美は余白美に通じます。(明子評)

今朝は  
空は青く  
雲は白く  
風は涼しく  
心は静か

漢字部 師範 土屋 光輝

字間を思い切って空けた構成は語句の静謐さを思わせる。石門頌あたりの線質で隸書作品を飾った。

◎漢字部総評 上級作には自分なりの工夫も見られた。級位のスタートは「習う」から始まるが唐時代の楷書の目習いも。(翠風評)

但語  
聞響  
芝山

かな部 師範 小野寺白帯

大らかに伸びのびと気持よいリズムです。名前が少々間伸び。位置も一考ノ是非創作を期待します。

◎かな部総評 難しい文字が少なかつたためか、概ね佳作。ただ却って小さく細すぎて貧相なものも散見、潤濁にも配慮を。(洋子評)

てんてんてん  
てんてんてん  
てんてんてん

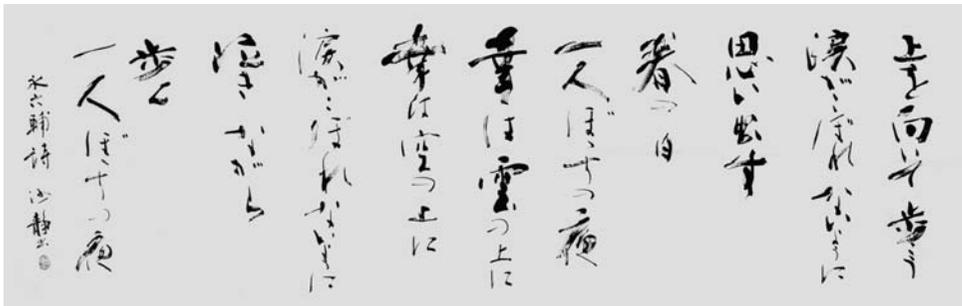
今月の

# 特別研究部優秀作品(特選)

現代詩文書

(大雲) 池田沙静

「上を向いて歩こう」



55×174cm

池田沙静書

- ◆永六輔詞を淡々と口ずさむように表現。自然な行構成に潤渾の変化がリズムを醸し出している。(大雲評)
- ◆歌が聞こえる、と思わせられ、やがてそれは消え、視覚的な美しさに魅了された。美しい作品です。(明子評)
- ◆とつとつと書き進め詩情をよく表わしている。素朴な中に細部に技巧を感じさせる運筆は見事である。(蒼玄評)
- ◆思わず紙面からこの歌のリズムが胸に浮んでくる。そのリズムに合わせたとような墨の濃淡がびつたり。(倫子評)

現代詩文書

(大拙) 畠中成山「種田山頭火の句」



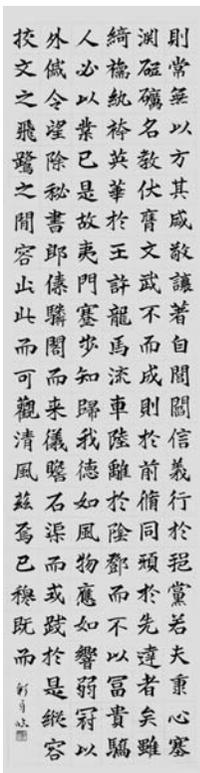
172×56cm

畠中成山書

- ◆強弱つけた筆の流れは句の流れに合った感がする。二字目の「の」は少し筆の回転に無理があるよう。(倫子評)
- ◆大胆な表現は、一瞬の閃きから生まれたのでしよう。山頭火への思い入れの深さが伝わる力作です。(明子評)
- ◆山頭火の句を大胆に一行構成で見せる。動きある渴筆が紙面に表情を与え、落款の細線が効果を発揮。(大雲評)
- ◆流れリズムがあり大作の風格がある。濃墨だが線の切れもあり潤渾が鮮やかだ。益々の活躍を。(蒼玄評)

臨書

(英峰) 吉瀬彩雨「高貞碑」



135×35cm

吉瀬彩雨臨

- ◆誠実に忠実に真正面から向き合う心が伝わり感動です。丁寧な技術の力の先を更に見せて欲しい。(明子評)
- ◆忠実な筆使いで細い所まで神経が行き届いた。ゆったりとした表現に少し動きのある力強さ欲しい。(倫子評)
- ◆細子を品よくまとめ細部まで神経の行き届いた線である。六朝の力強い運筆を出すよりよい。(蒼玄評)
- ◆着実な運筆でバランスよくまとまる。やや筆端の切れに弱さを感じる所もあるが観察力の確かさに敬服。(大雲評)

漢字（もく）西川藤象「五言二句」



西川藤象書

172×56cm

- ◆ たつぷりとした筆致で、構え大きく堂々の作。後半の濁筆部やや軽く浮いた感あり。鋭く冴える線を。(大雲評)
- ◆ 豊かな人なのであろう。技術の確かさと表現力を余すことなく見せて頂き幸せ。作者はもつと幸せ？ (明子評)
- ◆ 重厚な表現でゆるぎない運筆は見る者に大きな世界を見せてくれる。潤渾もあり一つの絵を見るようだ。(蒼玄評)
- ◆ 字から筆者の呼吸を感じる激しさは素晴らしい。途中の息切れがなく体全体の動きが目に浮ぶよう。(倫子評)



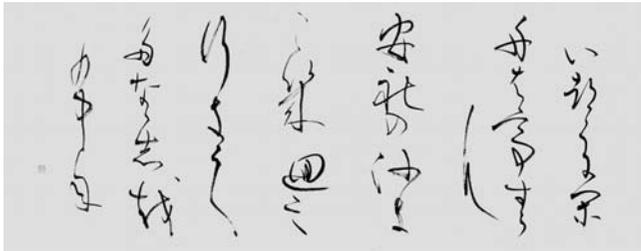
工藤山房書

70×135cm

前衛書（若葉）工藤山房

「時」

- ◆ 大きな身の動きを感じる作品、線の流れが次々と移り行くさまは心なごむが、左の一筆流れと異なる。(倫子評)
- ◆ 見事な構成でスピード感ある作品。やや飛沫が多く騒がしい。重厚な線がどこかにあると面白い。(大雲評)
- ◆ 瞬間芸術の迫力と魅力が伝ってくる。広がりを感じるが、深みを感じられないのは何故？ 墨色か？ (明子評)
- ◆ スピード感あふれる作品、線質は良いが紙と墨が合わないのか深さを感じない。墨色の研究を。(蒼玄評)



神谷雲卿書

52×135cm

かな（天雲）神谷雲卿

「高市連黒人の歌」

- ◆ 丁寧に確実な表現は十分です。更に省略を心がけ、連綿を手に入れると奥行きが生まれるでしょう。(明子評)
- ◆ 線の切れもよく空間の構成も良いがリズムが単調で見せ場が必要である。書は流れが大切強弱がほしい。(蒼玄評)
- ◆ ゆったりとした動き、筆の流れにすっかり乗った感。欲を云うと筆の濃淡に変化が出れば…。(倫子評)
- ◆ 安定した筆力で坦々と書き進められた作。やや強弱潤渾に乏しい。余白をもう少し意識すればよい。(大雲評)

創作の部(64点)	漢字	11点
かな	13点	
現代	34点	
篆刻	1点	
前衛	15点	
臨書の部(25点)	漢字	23点
かな	2点	
総出品点数	89点	

- 〈特選候補者〉
- 〔創作の部〕
- 〔漢字〕 千葉 影山 扇葉  
墨宣 錦木 梅道  
苑書 武山 櫻子  
〔かな〕 奥田 小林 純風  
〔現代詩〕 泉柳 加藤 紫翠  
大雲 長島 僊雨  
松風 西條 松雲  
東実 吉田 眞理  
立精 千葉 白苑  
〔篆刻〕 桂月 平野 草堂  
〔前衛〕 咲野 佐藤 ミヨ  
青蓮 日野 佳由  
蓮紅 大友 紅蓉  
秀水 坂井 初江  
〔臨書の部〕 大雲 佐藤 希雲  
英峰 佐藤 桂香  
墨宣 松下 紅月  
樹原 庄司 咏艸  
大雲 江本 興舟  
〔かな〕 蓮紅 千葉 華紅

漢字研究部  
(高貞碑)

選評名越蒼竹

今月のホープ作品



佐藤初香

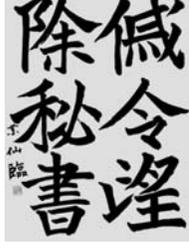
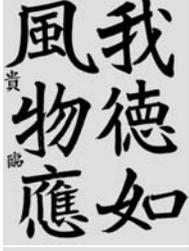
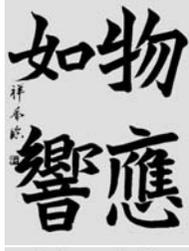
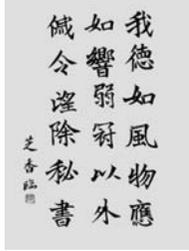
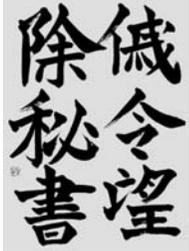
漢字研究部 特選 佐藤 初香

五文字の半紙臨書としては文字がやや大きすぎるくらいはあるが、どの点画も緩みなく書かれており、絶妙の文字配置となっている。次の文字の「應」が書かれていたら息苦しい感じなので、どこを選んで書くかは重要。

◎漢字研究部総評

楷書は基本的に一画一画を着実に書き、積み上げ

ていって文字を構成するのですが、特に北魏風の楷書ではそれが顕著です。唐風楷書に比べて横画やハネ・ハライに力を含めるため、軽いところがなく、重厚な印象となります。その特徴をきちんと意識した臨書が多く好感が持てました。臨書するにあたってはまず雰囲気作りが大切で、これに慣れてくると楽しくなります。条幅に書く場合は、あまり字を詰めて書かず字間行間の余白を大切にすることがあります。



光 有 美 芝 祥 菜  
津 子 枝 香 仙

純 貴 晃 遊 桃 芳  
風 子 代 山 華 翠

朱 蒼 大 彩 珠  
星 香 雪 雨 光

杏 久 麗 竹 英 炎  
邑 美 流 鈴 子 秀



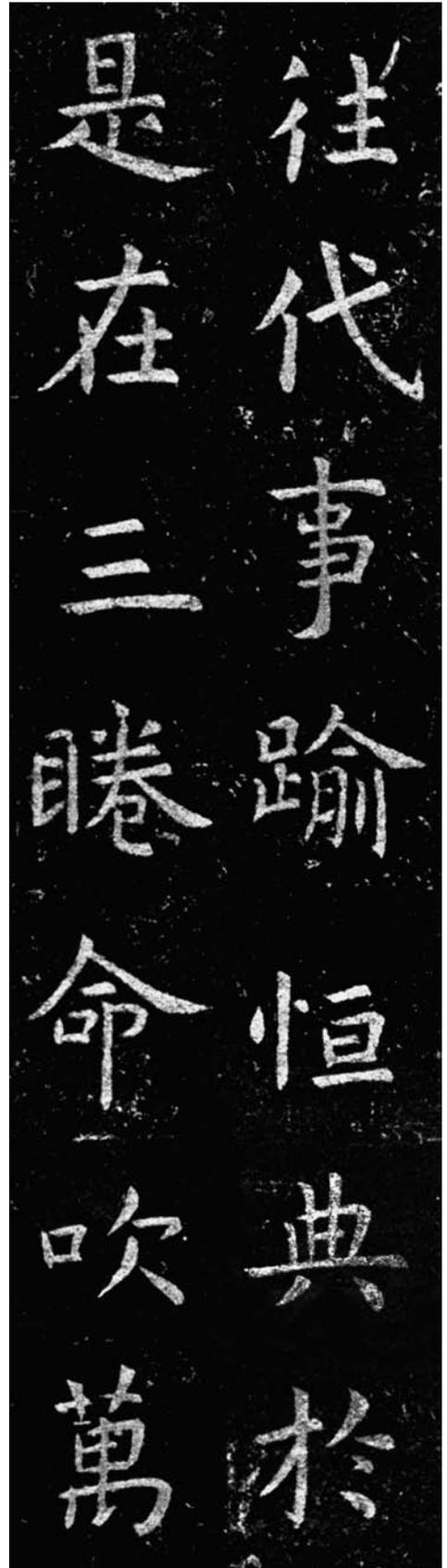
〔特別昇級試験臨書課題〕

孔子廟堂碑（楷書）

漢字部

第一種

半紙に写真掲載の中から5字を臨書・それ以外は不可



往代事踰恒典於是在三眊命吹萬

美人董氏墓誌銘（楷書）

漢字部

第三種

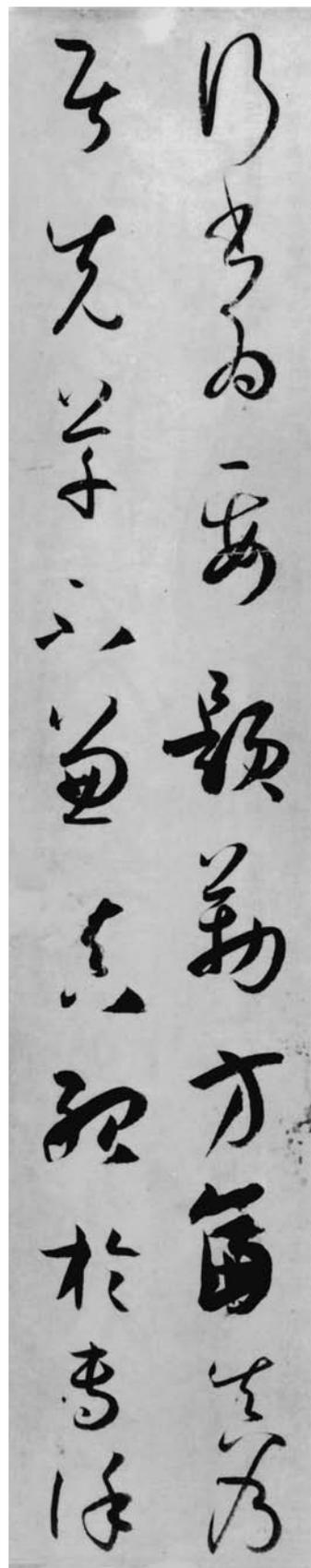
半紙に写真掲載の中から24字〜30字を臨書・それ以外は不可



美人姓董。汴州。恆宜縣人。也。祖佛子。齊涼州刺史。敦仁博洽。標譽鄉閭。父後進。

欣俛仰之間以爲陳迹猶不能不以之興懷況脩短隨化終期於盡古人云死生亦大矣豈不痛哉每攬昔人興感之由

欣。俛。仰。之。間。以。爲。陳。迹。猶。不。能。不。以。之。興。懷。況。脩。短。隨。化。終。期。於。盡。古。人。云。死。生。亦。大。矣。豈。不。痛。哉。每。攬。昔。人。興。感。之。由。



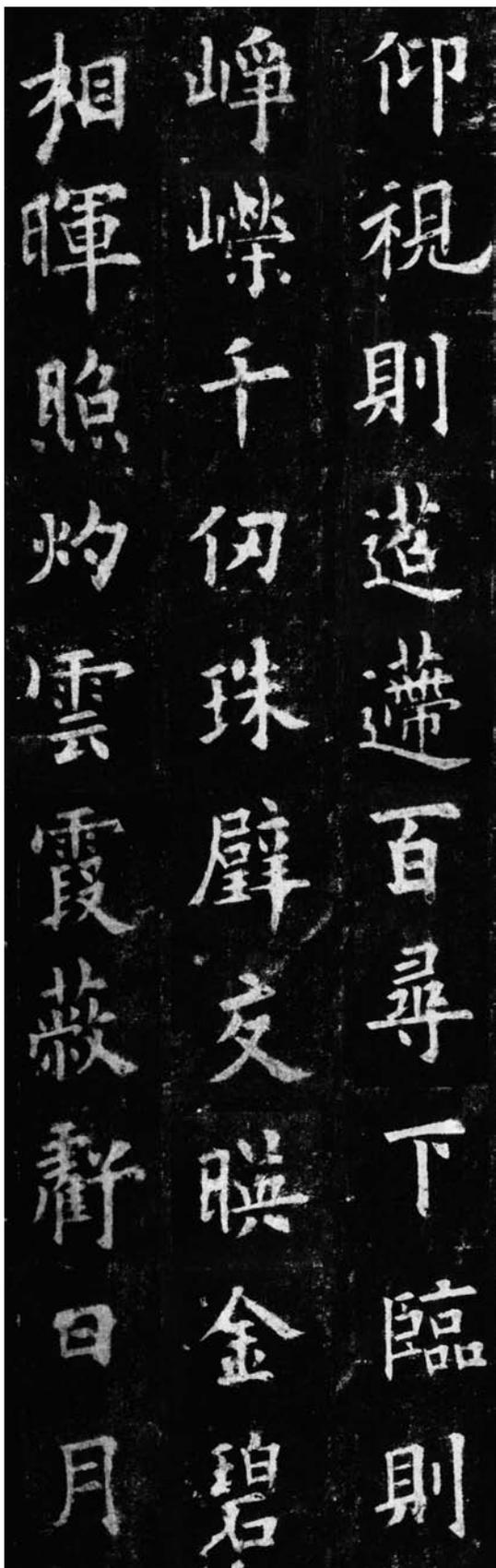
行書爲要。題勒方島。真乃居先。草不兼真。殆於專謹。

九成宮醴泉銘 (楷書)

漢字条幅部

第二種

半切に写真掲載の中から14字を臨書・それ以外は不可



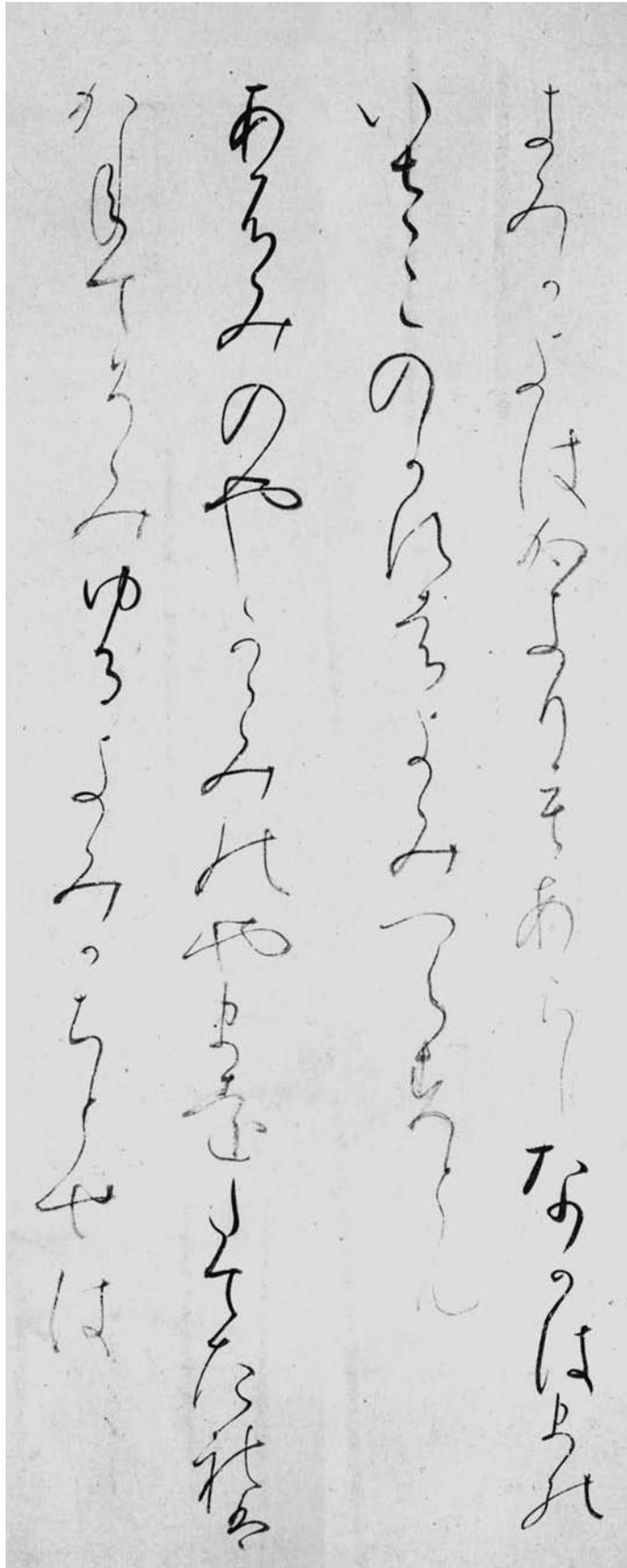
仰視則造遶百尋。下臨則崢嶸千仞。珠壁交映。金碧相暉。照灼雲霞。蔽虧日月。

高野切第一種

かな部

第一種

半紙に写真掲載の和歌・二首を書く・それ以外は不可 (料紙可)



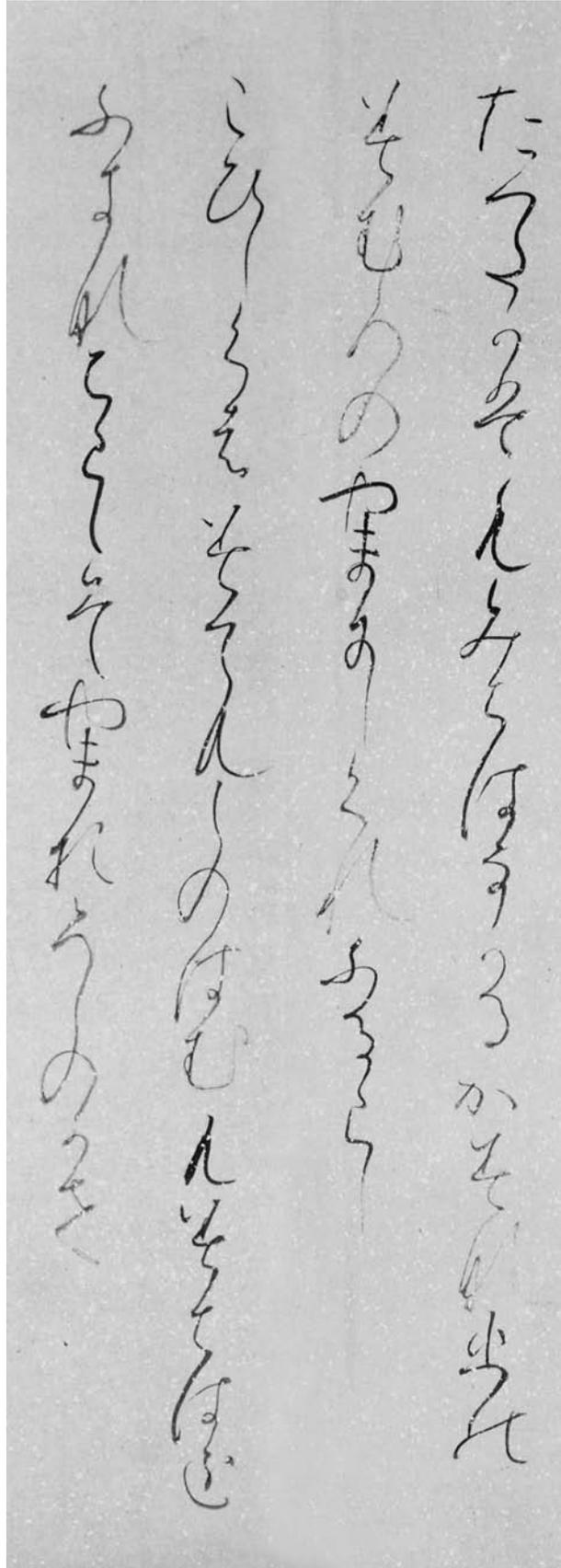
きみがよはかぎりもあらじなはまのいさごのかずはよみつくとすとも  
支可 支可 毛能 多能 多能 礼能 年能 者須 支可 春无  
 あふみのやかみゆのやまをたてたれば／かねてぞみゆるきみがちとせは  
不可 可支 能能 多能 多能 礼能 年能 者須 支可 春无

高野切第二種

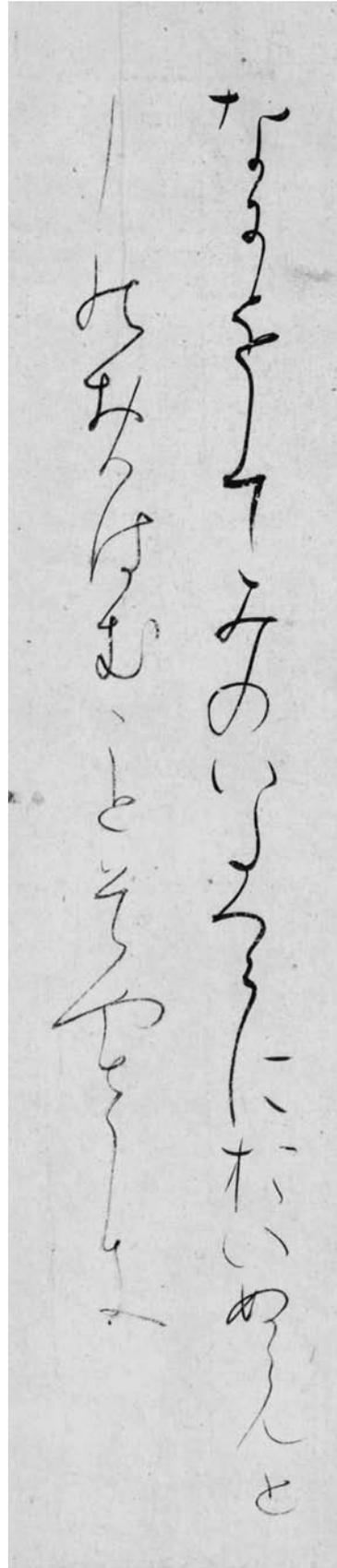
かな部

第二種

半紙に写真掲載の和歌一首を書く・それ以外は不可(料紙可)



たつたがはもみぢばななるかみなびのみむろのやまにしぐれふるらし  
多可盤无 者美无 奈可 美那能 美支那 尔  
 こひしくはみてもしのばむもみぢばをふきなちらしそやまおろしのかせ  
可世



なルに多を英して能みの无いた支づ支ら支にお支い支ぬ支ら支んと支し支のお支も支は支む支こと支ぞ支や支さ支し支き支

ご注意!!

**名前のかき方**  
 どの部も氏名または名、号を書く。  
 臨書は○○臨と書く。  
 印だけでは失格、特になな・ペン  
 字は注意のこと。

表紙写真 「孔子廟堂碑」

お知らせ

8月11日(土)

15日(水)

事務所は、夏季休業させていただきます。  
 よろしくお願いたします。

(財)書道芸術院

出品券 9月15日締切

※9月号の課題予告は  
 45ページに記載。